

武産合気の定義

「たけむすあいき」と読みます。

「武産（たけむす）」と「合気」に分けて定義を示します。

これらの言葉は言霊と同じように複数の意味が重層しています（同音多義）。

言霊の幸ふ国の人（日本人）であれば、和歌の掛詞（かけことば）や駄洒落という同音多義（同音異義語）の言葉遊びがあって、それと同じようだと受け取ることができるでしょう。

「武産」の定義：

- 1) 「武が産まれる」 ある原理（理合）によって無限に技が産まれてくる状態をさす。
- 2) 「産すびの武」 神の愛の気結びによって相手と一体になるという原理（理合）をさす。

「合気」の定義：

- 1) 「神人合一」 我即宇宙と同じで、自分の中心が無限の宇宙の中心になり、相手をその中心（腹中）に吸収して一体となる意。柳生新陰流では、「自分と敵との人中路（正中軸）を真直ぐに合わせ、自分の人中路を真直ぐに切り通す」という理合になっている。
- 2) 「愛気」 合気とは愛なりで、万有愛護の大精神（神の愛）で相手を腹中（中心）に包み入れるということをする。鹿島神流では、この理合を「包容同化」と表現している。

「武産合気」の定義：

簡単に定義すれば、「武産合気」は「呼吸力（註 一点に集中するという意味よりも、相手を腹中に吸収して一体となって動く時に相手を感じる力）という理合（あるいは術理）によって技が無限に産まれる武道」ということだと思います。呼吸力が単なる「脱力」とか接触点の圧力を調整する「触れ」とかいう理解でなければという前提に立った定義です。

参考：

斉藤守弘先生（岩間）の「武産」の定義

「ある状況に最も適した方法で無限に技が産まれてくる状態をさす。」

<http://archive.li/JA7Vu>

「武産とは合気道の原理を研鑽することにより、無限の技が生まれてくると言う、実技の問題である。」

<http://www.geocities.jp/kumekenaikido/intro.html>



『合気道で悟る』砂泊誠秀著（2002）pp.42-45 「武産合気とは何か」に述べられた神示

- 武産の武を**法座**（後述の註を参照）を以て使命付けられてゐるものは汝一人以外に過去現在にない。この有難い使命を精神を以て達成する様努力を以て貫け。
- 魄の武と組織に対しては隠居して終え、隠居する年になって武産の武の使命が大神から授かった因縁を思え、魄をすてて魂に精進して武産の武を楽しんでいたせ。
- 無手の戦いは魂（こん）のひれ振りじゃ。武産の武の精進は茲（ここ）から出発するのじゃ。
- 型を破って型なき型を工夫せよ、いくらでも機に応じて型が形に添って**結び生じる。これが魂の武産である。自在の生みの氣を結ぶことが肝要ぞ。**
- 自然の力、仕組を念頭において、之に合う所の**自然の武を生み出すのが武産なり。**常に新しきを生み出すのが武産である。

- 皆、空に愛の氣を生じて一切を抱擁する。之、武産なり。
- 種を有しても大地が愛をすくってうけてくれねば結び生ぜぬ。故に、初の兆の愛の氣に結びて武産の愛の氣を以て業を生め、一時のからくりでなく、神業の神力が生じてくる。
- 魄の觀念信念にとざされて、常に氣ぜわしく、心乱して、物の仕組に明け暮れ、心を煩わすのは、武産の精進とは、はるかに違ふぞ。
- 天地の理に即応した変化自在の創造が武産の本義なり。
- 武産の武は、形より心を以て、本とし、之の魂のひれぶり、武としての活躍なれば、之大神の愛の氣結（きむすび）である。
- 自然の力、仕組を念頭において、之に合する所の自然の武を生出すのが武産なり。
- 武は常に変化を以て生命とする。常に恒に新しきを生み出すのが武産である。
- 型を破りて型を創造生成発展すべし、武産の武は廣大且つ微妙なり。
- 武を授ける時は、武産のことあげを用いよ。
- 眞の武は武産の意義を明（あきらか）にするにあり。
- 武産には眞の自在がなければならない。魄には行き詰りが来る。
- 魂のひれぶりは自在にして極りなし、これ武産の極意なり。武の極意は形はない、心自在に生ず、これ極意なり。
- 形をすてて心の精進を第一義として武産の武を火の玉となって求めよ。魂の土台がしっかりと中心に定まらねば、枝葉の術や、仕草は、無駄となるぞ。
- 武産の武に精進するは魄の為にあらず、これ魂の縁の結びなれば、よく肝に銘じて心得よ。
- 魄は人の身にとりて必要なもの故、其眞義を悟りて魂のひれ振りは此魄の表れによるもの故、身と心、二つが一つになって武の変化を生む故、なくてはならぬ魄である。
只、魄を主として心を第二にする順序の、転倒、矛盾を正すために魄をすてると申すので、決して魄を不要とするに非ず、魄はむしろ大切なものである。
- 今日まで、神の使命にたずさわって武をなしたる者、一人もなし、植芝として感泣して精進せよ。

<http://kofa.jugem.jp/?eid=523> 出典は不明

大先生曰く「いたずらに勝ち負けを争っても、残るものは、勝って虚しく負けて口惜しい我執の澱ばかりだ。勝とうと気を張っても何も見えはしない。眞の武の道の根源は「愛」であり、万有愛護の和合の心だ。愛をもってすべてを包み、氣をもってすべてを流れに任せる時、初めて自他一体、氣・心・体一如の動きが展開する。相手も我（われ）であるとの情を持ち、愛をもって合気することこそ、眞の武の道の要諦である。すなわち、武の道を究めれば、おのずと我即宇宙・宇宙即我という大いなる安心感が産霊され、氣・心・体一如の充足感が溢れるに違いない。それが武産という眞の武の恩恵なのだ。」

「武産の武の阿吽の呼吸の理念力で魂の技を生み出す道を歩まなくてはならない。」

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~obama/taijutu/tatujin.html>

又、合氣道の体技が「武産合氣」と言われることの意味するところは「武」の「産みだす元（もと）」が合氣道であるということなのです。つまり開祖が「動けば技になる」と仰っていたことなのです。その「元」が「結び」の技術であり「相手と一体になる力」つまり「呼吸力」だと言われています。具体的には、相手と結ぶ・相手と一体になる為に相手との接点の微妙な感覚を察知することにより結び和合します。「呼吸力」とは「相手と和合する」為の体技技術であって、過去の殺傷技術ではないのです。

この「呼吸力」が身に付いてくると形のある技は必要がなくなってきます。相手が自分に対して触れて（攻撃して）きたら、相手は自分自身の力によって自然に崩れ落ちるようになります。そして肉体の体技技術と同時に、精神の自己開放を「意識」した体技技術を修行することにより「敵を無くした絶対的自己完成」の状態に至れば、殺傷技術としての体技が不必要な「合気道の達人」となります。

「開祖は「真の武の道は武農一如、**武産合気**の**生命力生産の実践**こそが原点である」とのかねてよりの信念に従い、妻はつと共に東京から岩間の地に移住しました。」

武産は御親の火水（かみ）に合気してその営は岐美の神業

『合気道開祖植芝盛平（現在、『武の真人』）』砂泊兼基著（1969）p.164

『「合気」という言葉は古事にも見られるが、その意味は違うようだ。また**道主（植芝盛平）**のいう「合気」**そのものは、無限に深く、広く、道の発現の真意を至極簡単明瞭に表し、神人合一の意を簡略にした意味をも持つのである。**』

『合気道』植芝盛平監修 植芝吉祥丸著（1957）pp.50-52

『「合気」という名は、昔からあるが、「合」は「愛」に通じるので、私は自分の会得した独特の道を「合気道」と呼ぶことにした。したがって、従来の武芸者が口にする合気と私の言う合気とはその内容が根本的に異なるのである。

合気とは、敵と闘い、敵を破る術ではない。世界を和合させ、人類を一家たらしめる道である。**合気道の極意は、己を宇宙の動きと調和させ己を宇宙そのものと一致させることにある。**

合気道の極意を会得した者は、**宇宙がその腹中にあり、「我は即ち宇宙」**なのである。

私はこのことを、武を通じて悟った。

いかなる速攻で、敵がおそいかかっても、私は破れない。それは、私の技が敵の技より速いからではない。これは、速い、おそい問題ではない。はじめから勝負がついているのだ。

敵が、「宇宙そのものである私」とあらそおうとすることは、宇宙との調和を破ろうとしているのだ。すなわち、私と争おうという気持ちをおこした瞬間に、敵はすでに敗れているのだ。

そこには、速いとか、おそいとかいう、時の長さが全然存在しないのだ。

合気道は、無抵抗主義である。無抵抗なるが故に、はじめから勝っているのだ。

邪気のある人間、争う心のある人間は、はじめから負けているのである。

ではいかにしたら、己の邪気をはらい、心を清くして、宇宙森羅万象の活動と調和することができるか？それには、まず神の心を己の心とすることだ。それは上下四方、古往古来、宇宙のすみずみまでにおよぶ、偉大なる「愛」である。

「愛は争わない。」「愛には敵がない。」

何ものかを敵とし、何ものかと争う心は、すでに神の心ではないのだ。

これと一致しない人間は、宇宙と調和できない。宇宙と調和できない人間の武は、破壊の武であって、**真の武産（註 武を生み出すこと）**ではない。

だから、武技を争って、勝ったり負けたりするのは真の武ではない。真の武はいかなる場合にも絶対不敗である。

即ち絶対不敗とは、絶対に何ものとも争わぬことである。

勝つとは、己の心の中の「争う心」にうちかつことである。あたえられた自己の使命をなしとげることである。

しかし、いかにその理論をむずかしく説いても、それを実行しなければ、その人はただの人間にすぎない。合気道は、これを実行してはじめて偉大な力が加わり、大自然そのものに一致することができるのである。』

歴史的背景：

『ムー』1997年4月号 p.173 - p.187「古神道を現代に甦らせる中西清雲」より抜粋
「中西夫妻が修法研鑽に明け暮れていたときに出会ったのが、合気道の開祖・植芝盛平だった。その出会いは、茨城県岩間町に住んでいた大本教信者・赤沢善三郎という人物の仲介による。中西夫妻に心酔していた赤沢が、彼らの活動を植芝盛平に話したところ、植芝が非常に興味を持ち、昭和12年のある日、突然、東京・板橋の大山に住んでいた中西夫妻のもとを訪ねてきたのである。

植芝は中西夫妻に対して「合気道（註 理合としての「合気」でなかったか？ 合気道という流名は昭和17年大日本武徳会で付けられたので、まだ言葉が存在していなかった）という気の原理を開眼するために指導を受けたい」と申し入れてきたという。

その後、太平洋戦争となり、昭和16年に赤沢が中西夫妻を岩間町に招聘、夫妻はその地で翌年から本格的に『古事記』（ここにいう『古事記』とは、神より特別に清雲に下賜されたもので、正式名称は『布斗麻邇古事記伝』といわれるものである）をベースにした言霊の解明に挺身することになる。この研究は単に書齋的なものではなく、**法座**（註 人間の理性では解決できないような問題があれば、それを担当する神々に降臨を願い、その方法や教示を得るために行う修法）を立てて霊的に順次調べて解明していくという、神秘主義的なアプローチの異色のものだった。」

『合気ニュース』No.130 赤沢善三郎氏（大本信者の息子）のインタビュー 氏は昭和8年入門

◆ 武産合気

赤沢 戦後大先生が、“たけむす”っていう名前を使うようになったのは中西光雲の関係からです。中西光雲というのは古事記の言霊学を研究していました。だから“たけむすあいき”という名前は古事記から出ている言葉なんですね。

中西さんの奥さんが巫女さんで、大先生は中西さんのところに日参していましたからね。先生は大本を離れてから大本の信者でない中西さんとのつきあいから○△□ということをやったのではないのでしょうか。

「たけむす」と「さむはら」：

『「ことたま」に依る 十種太祓（布留部祓）の解明』中西光雲著（1970）

開祖は、「武産合気」と書いて「さむはら」と読ませたそうです。この本に「正勝吾勝の武（たけ）むすの武（ぶ）・さむはらの力」、「造化生成の武むすさむはらの気」と書かれていることから、「武むすの武＝さむはらの力」、「武産＝さむはら」とであると理解できます。

そうすると、次の p.242 の「さむはら」の言霊に依る解（言霊解）は「たけむす」のことを説明していると理解して良いのではないのでしょうか。

p.242

さむはら 「さむ」― 開いて結ぶ（註 「さむ」は「覚む」か？）、「はら」― 孕（はら）んで結ぶ意。大自然を土台として、夫々の因と果に成り表はれる武の働きを謂ふ。

万有ならば、天地人の理合を先ず第一に知り（仏のことを天地人の“調合師”と謂ふ）この三玄（さんげん）の和に結びて科学する業（わざ）・力を云ふ（註 三玄：三つの奥深い道理、三元：三つの根本）。

電気を孕んだ雷が、電光石火の早業を以て偉大なる働きをする。是自然の気の「さむはら」である。
又一粒の草種が季の節に合せて芽を出し、茎に応じて丈夫に根を張り、巡りに合はせて花を開き実を稔らせる。是を「さむはら」の武と云ふ。

開祖の言葉で表現すれば、「はら」は「息を吸い込む折には、ただ引くのではなく全部己の腹中に吸収する。」

（『合気神髄』p.14）や「合気道は相手が向わない前に、こちらでその心を自己の自由にする。自己の中に吸収してしまう。」、「人の目を見たり、相手の技を見たり、姿を眺めているんじゃ無いですよ。全部自分の腹中へ、身の内へ入れてしまうんですよ。自分の腹の中に在るんだから別に争う必要が無い。大宇宙が自分に在るという事や。全宇宙が自分の腹中に在る事や」（昭和 40 年頃のラジオ会見記『合気ニュース』142 号 p.15）と同じ意味になります。

そして、「さむ（開いて結ぶ）」は一体となることになるかと思います。

「さむ・はら」で吐く・吸うの「呼吸」を表す言葉になるので、ここから「呼吸力」という言葉ができたのではないのでしょうか（呼吸力も同音多義の言葉ではあるが）。

「武産さむはらの合気（武産＝さむはら）」（『合気神髄』p.78）

「祝言を伝える合気武道は大神のむすびにして古事記、法に結ぶ天の浮橋に立たして武を生む神と万物が、愛と熱と光と力によりて同根一体となりて業を生むのが本義である。」（『合気神髄』p.79）

「本当に美しい地上天国実現のために、今度（万有愛護の）精神にそって立つ武には、殺生の技はない。つまり、自然の摂理によって、魂魄あわせた引力によって、いかなるものも自己の腹中に吸収され、（一体となり）自己の思うままになるために大きなみそぎの本義がある。これが（武産）合気です。」（『武産合気』p.162）

開祖に武産合気の技を掛けられた時、「受け」を取る人が感じたことは次のようなものです。

武田義信「大先生は道場に現れただけで吸い込まれる感じでしたね。山口清吾先生も吸い込まれるんだけど、大先生は『同化する』という感じが強くて、取る・取られるの相対的な関係では無く、『一つに成ってしまう』感覚。言葉もね、根源の所、魂で話して居る感じでしたね。」（『秘伝』2010 年 1 月号 p.59）

「武産合気」と大東流の「合気（相手の力を無力化する技術）」を混同しないことも重要だと思います。

道文：

「わが神典（布斗麻邇古事記、言霊で解いた古事記）による武産とは、絶倫の日本の武（絶対不敗、絶対に誰とも争わない武）である。しかれば、神変自在、神通千変万化のわざを生み出す（無限に技が産まれてくる）のである。真空の気（宇宙に充滿する気）と空の気（五体の周りにある気）を、さが（性）と技とに結び合いて（イメージで気結びして、呼吸力を発揮して）、くり入れながら（繰り返して鍛錬しながら）、技の上に科学しながら（工夫しながら）練磨するのが、武産の合気道である。」（『武産合気』pp.89-90）

「その浮橋に立たなして（結ぶ中心となる宇宙の中心・腹中に吸収して）合気を産み出す。これを武産合気といいます。今までは形と形の物のすれ合い（相手と自分の接触点での触れ）が武道でありましたが、それを土台として（それも大切であるが）すべてを忘れ（そこから離れ）、その上に自分の魂をのせる（愛の心を使う）。自分に愛の心が無かったら万有愛護の大業は成りがたく、愛のかまえこそ正眼の構え（自分から攻撃しようとする上段の構えではなく、相手に対応して動く愛の構え）であります。無形（魂・心の

作用)の真理、日本の武道は(相手の気を押さえるとか制するとかいう)相手をこしらえてはいかぬ。無抵抗主義(相手を受け入れて腹中で結ぶこと)、これこそ霊界の処理法(無抵抗主義)であり、念彼観音力(相手に対応して、相手の力を無力化するのではなく、同化してしまう呼吸力)と申します。」(『合気神髄』p.129)

道歌：

武産は 御親の火水(かみ)に 合気して その営みは 岐美の神業(かむわざ)
気の御わざ おろちの霊出(ひで)や 蜂の霊出 魂(たま)の霊出ふる 武産の道

武産合気の原理の検証：

Wikipedia「合気道」にある「このように相手との接触点を通じ技を掛ける機微と一連のプロセスを「結び」「導き」「崩し」と言い、合気道の技の大切な要素として、また精神理念に通じるものとしても強調することがある。」では次の技はできない。



肩を押したら飛ばされた



膝を押したら飛ばされた

肩を押したり膝を押してくる相手が自分の中心(臍下丹田辺りの正中軸をイメージして)に入ってくると思い、その時に正中軸が自由落下で落ちたと想う(感じるという方が感覚的に近い)と、相手は肩や膝ではなく動いた中心に合わせて無意識にバランスを取る。そうすると結びが接触点ではなく自分の中心・宇宙の中心のできるので、それから“宇宙の中心が動けば無限大の宇宙全体が動く”と思って前に出たり膝を折ると、一体化(同化)した相手と一緒に動く。

おわりに：

ここでは時間（宇宙の宙）の中心の結び（過去・現在・未来の統一）について述べませんでした。まだ私の理解が足りていないからです。

この原理は開祖とは違うかもしれませんが、無抵抗主義の技の原理にはいろいろな解があると思います。武産合気の定義についてもいろいろな解釈があると思いますが、少なくとも日々の稽古の中で工夫できるようなものとして理解できたら良いと考えています。

なお、それを英語で表現すると、もっと分かり易いものになると思いますので、英語にして発信して下さる方には敬意を表します。

（八千代合気会 乾泰夫 2017/8/5）